山と博物館

第24巻　第6号　1979年6月25日　大町山岳博物館

雷鳥　冷乗越にて　　撮影　清沢　由之

はちの水汲み

はちが水を汲んでくるのです。本当に。もちろん、バケツなどは持って行きません。口でふくんで運ぶのです。

昨年の夏のある日、昼近く、わたしはわが家の小さな池の水蓮の葉の上へ、せっせとアシナガバチが通うのに気がつきました。ふと興味をひかれ、しばらくその動作を見ているうちに、それは、はちが水を汲みに来ているのであることがわかりました。広い葉の中にたまった水玉から水を吸うとブウと舞いあがって行く。

池から一〇メートルばかり離れた出窓の横に小さなはちの巣があって、その一つ一つの巣穴の入口が点々と水滴で光っています。これはみんなはちが運んだものなのです。一方巣穴のふちにとまって激しくはねをふるわして風を送っている別のはちもいます。彼らは、巣の中の幼虫のために巣の冷房をはかっているのでした。

つぎの日も、またつぎの日も、巣に太陽の直射光線のあたる午前十一時頃になると、水運びが始まるのです。水を運ぶはちも、風を起こすはちも、太陽に負けまいと一生けん命です。

ある日、わたしは、ちょっといたずらを思いついて、まだ太陽の光線が巣へ届かない午前十時頃、鏡で日光を反射させて彼らの巣を照らしてみました。するとどうでしょう。この小さな者たちは、まだ時間前なのに、水運びと風送りを始めるではありませんか。わたしは驚きました。そしてそれ以上に、この小さな者たちのまじめさ真剣さに打たれてしまいました。

（仁科台中学校長　住田　正）

山登り雑感

柳沢昭夫

(1)山に狂い込んで。
(2)恐れおののいて登攀して、こりもせずにまた登る。
(3)ザイルのトップの誇りと栄光。
(4)山登りに価値なんてないのに。
(5)自由な発想で自由な登山を、だが山は大きく人間は弱い。

(1)山に狂い込んで。

私に、大きな山の経験があるわけではないが、山登りを始めた頃から、岩や氷の大きな岩壁を登るのが夢だった。今でも、より厳しいより難しい、より困難な、氷壁や岩壁は私の憧がれである。考えてみれば馬車馬のようにそれだけをめざして登り続けてきた馬鹿者かもしれない。だが私は決して後悔していない。記録として、発表できるようなビッククライミングも、ヒマラヤの高峰登攀も行うことができなかった。

だが、今でもそれを夢み続けているし、憧れ続けている。いや、むしろ憧れ続けているだけで終る者であるかもしれない。しかしそれが自分の山登りであることを少しも悔やまない。少なくとも今でも自分の子供達に山の夢を語れることをとても幸せに思う。それは、夢の大きさや、夢の実現ではなくして、夢を求め続けて努力する過程が私の登山である。結果として何かを残すより、その過程の方がもっともっと大切なことなのである。もっとも、何も残せなかった者の僻みかも知れないが、しかし、それでよかったと思うし、そうありたいと思う。

「山は、小手先の技術ではない。山は厳しく大きい、人の総合力だ、岩登りだけしか知らない片輪者になるな」と教えてくれた先輩がいた。「オールラウンドな登山者」になれと導びいてくれた先輩がいた。そんなよき先輩達からみれば不出来な後輩である。なぜなら、クライミングひとつに憧れ続ける片輪者の私だから、しかし、私はそれでよかったと思う。ひとつのことに憧れ続けてよかったと思う。実際には、いろいろな山登りをやっているのだが、憧れ続けたものはひとつでよかったと思う。マラソンランナーはスタートしたらゴールしか考えないという。沿道の応援もざわめきも、ゴールに集中すれば潮騒のように遠くなってゆくという。文字どおり、わきめをふらずにかけぬけてゆく。私もそうありたいと思う。ひとりくらいおかしなクライマーがいてもよいのではないだろうか。皆が、りっぱな登山者でなくても、自分の夢に狂い込む者がいてもいいのではないだろうか。

もしかしたら、狂い込んだ奴が世の中を変革してゆくのかも知れない。

(2)恐れおののいて登はんして、こりもせずにまた登る。

唐沢岳幕岩のような大きな岩壁に、新しいルートを拓らこうと試みたときや、冬の厳しい岩壁を登るとき山はあまりにも大き過ぎて、恐れおののく存在である。力つきて墜ちて死ぬかも知れないと真剣に考える。身に付けなければいけない技術、墜落したときの脱出方法、パートナーの救出方法、そして何よりも登攀技術と体力のトレーニング、毎日毎日厳しいトレーニングにあけくれながら、心は不安でいっぱいである。いいしれぬ不安、不定形の胸を締めつけるような苦しみ、ちょうど受験生が猛勉強に取り組みながらも失敗するかもしれないという不安におののき逃げだしたいと、もがくように幾度こんな心の苦しい岩登りを辞めようと思ったか知れない。誰に強制された由でもない。好きで好んで何でこんな苦しみを味うのかとどんなに自分に反問したことだろう。しかし、辞めることはいつでもできる。辞めたとしても誰も何とも言いはしない。自分で、俺はこれまでいいんだ、これで辞めたと思えばいつでも辞められたのに、なぜ辞めなかっただろうか。こんなに苦しむ登攀をやらずにもっと楽しい登山もあるだろうとどのくらい思ったことだろうか。

だが、自分であるとき、ひとつの線を引いて自分の登山の枠を決めたなら、自分の山登りはそこで終ってしまうような気がして、辞めることができなかった。年を取ったから、体力がないから、技術はこれまでだからと理由を付けることはいくらでもできる。私にとって山に憧れ続けて、夢を求め続けることは、自分に枠をはめないことにほかならない。自分で自分の限界を設定したなら、夢や憧れは胸に抱いているだけになってしまうだろう。だからこそ夢を求め続ける素晴らしさを大切にしたくてまた登る。

苦しくともそれでよかった。不安で過した毎日と一生懸命トレーニングに励んだ毎日がどんなに充実した日々を与えてくれたことだろう。

(3)ザイルのトップの誇りと栄光を。

ザイルのトップ、クライマーにとって何と誇りに満ちた言葉だろう。困難と不安と闘いながらパーティーをリードする誇りと責任がそこにはある。技術と体力はもちろんのこと強い精神力が要求される。人は誰れでも、精神的な圧迫には弱い。ゲレンデでは、技術と体力で登れても、実際の岩壁ではそうはいかない。登れないじゃないだろうか、力つきて墜落するのではないだろうか、天気が急変し荒天にみまわれるじゃなかろうか、ルートの選定は正しかったであろうかと常に不安にさいなまされて登る。誰でも、不安と真正面から闘いたくはない。逃げて、逃げて、逃げまくって、最後に不安と対決せざるを得なくなる。自分にとって、難しければ難しいほど不安は大きくのしかかってきて、そしてある瞬間に限界を超えれば、正常な思考力を失って破滅に陥る。無気分で、なすすべを失うのだ。だからこそ、ザイルのトップには誇りと栄光がある。

私もその誇りと栄光を失いたくはない。だがしかし、逃げれるものなら逃げたいのだ。それを誰が責めることができようか。人の哀しい性なのだと思う。

不安と常に真正面から闘って行く強いヒーローなんて私は信じない。たとえそれが愛しい者のためであろうと本当に不安にたち向えるであろうか。勝者の栄光よりも、敗者の悲しみの方が私にはよくわかるような気がする。いや、敗れるなかで人の弱さと悲しさが愛おしく思われてくる。冬の逆まく嵐の中では、何と人間は弱く小さい存在だろう。しかし、弱いが故に、悲しいほどの弱さの故に、人間のなんと愛しいことか、荒れ狂う吹雪の中で、不安なビバークの夜に人はその哀しさに涙して人を愛すのではなかろうか。

(4)山登りに価値なんてないのに。

私にとって、山登りは大切なものであると思う。しかし、本当にそうであろうか。そして、価値のあるものであろうか。

仕事をやりくりし、職場の同僚に迷惑かけ、家族に心配をかけ、子供達ともろくに遊んでやらず、暇さえあれば山に出かける。いや、暇を作っては山に入る。私はいい父親だろうか、いい社会人であろうか、自分に問うてみれば、はなはだ自信がない。山登りは、これだけ回りの人に迷惑をかけ、我がままを通す程の価値のあるものであろうか。つくづくい

けない者だなあと思う。趣味なら、ほかのものを選ぶこともできるし、「ほどほど」という言葉もある。にもかかわらず、山にのめり込んでしまった。人は何か道楽するわけだからと言い訳をしてみても、回りの人から見れば山登りなんて危いことしなくてもよさそうにと思うだろう。自分でも危険の大きいことを自覚しているだけに、なおつらいこともある。だが、山は私にとってどうしようのないものである。恋する人を思うように、休日がたまらなく待ち遠しく、胸のうちに突き上げてくる山へ入りたいという衝動は、自分でもどうにもならない激しい衝動なのである。つくづく人に迷惑と心配をかけながら我がままいっぱいに山に入ることのできる自分を幸せ者だと思う。

山登りで、いったい何を私は得ることができたであろうか。私の得たものは価値のあるものであろうか。世の中では、くその役にもたたないものではないだろうか、社会通念のうえからの価値判断を私は失ってしまったのではないだろうか。単なる自己満足のために登るのではなかろうか。しかし、価値判断で山に登るのではない。限りなく山に引き付けられて、どうしようもないから登ってしまうのである。厳しく、困難な岩壁に魅せられて、私はそこから脱出することができない。

私にとって登山は頭と心とからだを鍛えてくれるスポーツである。明るく、素直で、健康な私を鍛えあげてくれるスポーツである。極めて単純にそうなのである。世の中不健康で、からだも頭も心も健康であることがとても難しくなってきた。私の頭の中は、半ばテレビの植民地になっている。発想が半ばテレビ的なのである。もし、山登りをしていなかったら、完全に植民地にされた人生になったであろう。今、かろうじて山登り的発想で植民地支配と闘っている訳である。

もしかしたら、人間、頭と心とからだが健康であるためには必死で闘わなくてはいけないかも知れない。そのための勇気と闘い続ける努力をしなくてはいけないかもしれない。

いつかある日、私の子供達が親父が死にもの狂いで山へ登りながら、ひたむきに求めた、健やかで、人間らしくあるための生き方が分ってくれることがあるだろうか。それは、また山への愛であり、人間への愛ではなかろうかと思ってくれるであろうか。

(5) 自由な発想で自由な登山を、だが山は大きく人間は弱い。

山へ登って楽しむことに、いろいろの楽しみかたがあってもよいと思う。人、それぞれに山に求めるものがあってもよいと思う。自由な発想で、自由に楽しむことがあってよいと思う。山登りは、こうでなくてはならないと強制されるほどつまらない登山はない。

近頃、登山は多様化してきた。とても、素晴らしいことだと思う。いろいろな人が、いろいろな登山を楽しむようになってきた。登山が限られた一部の人達だけのものでなくなってきた。それが、高度成長経済の所産であろうと俗化されたとか嘆く必要は全くない。山登りが、社会生活の延長線にある以上、世の中のいろいろなものが山に持ち込まれてもそれはそれでよいのではないだろうか。

家族づれで、年寄り達のグループで、仲の良い友達で、職場の同僚で、趣味のグループで、山登りの仲間で、恋人達で、いろいろな人達が山に登るようになった。

観光開発の影響かも知れないが、夏だけが登山のシーズンではなくなってきた。岩や氷の岩壁を攀じ登る人も、ウォーキングを楽しむ人も、山麓でキャンプを楽しむ人も、花や小鳥を愛する人も山を訪れる。美しい風景を描こうと、写真に撮ろうと山を登る人もいる。

登山靴で登る人も、運動靴で歩るく人も、重たい荷物で頑張る人も、弁当だけでゆく人も混在する。

いや、もっと細分化すれば、クライミングでさえ多様化してきた。

いろいろの登り方があっていい。だが、山そのものは変らない。雨具を持っている人にも、持っていない人にも同じように雨は降るし、風も人によって区別して吹く訳ではない。初心者にも熟達者に対しても山は同じである。

つくづく山は大きいと思う。長い間、山を登り続けてきて、人間の知恵で対処しきれないほど山は大きいと思う。特に冬の厳しい風雪の山を登っているときなど、人間の経験することなど、山のことをほんの少し知るだけに過ぎないように思う。

どんなに知りつくした地形の山でも、霧や吹雪で道に迷う経験を繰り返えすであろうし、零下30度にも及ぶ冬の寒気と風に身をさらしているとき、誰もがこれで死ぬんじゃないかと恐しくなるだろう。どんなベテランといわれる人でも同じであろうと思う。自分の全智、全能をかたむけても測りきれない山の恐さがあるような気がする。

多様な形で、様様の人が自由な発想で登山をするのはとても素晴しいと思う。だが、どんな人が、どんな山登りをしようと山そのものは変りはしない。ハイキングであろうと、岩登りであろうと、家族づれであろうと、山仲間との山行であろうと、山は変らない。山のもつ厳しさは変らない。

良きハイカーや、良きワンダラーであるためには、良きクライマーであるのと同じように深い知恵と強い体力と山に対する厳しい姿勢が要求されるのではなかろうか。いや、むしろ、そのための努力は同じではなかろうか。

良きハイカーであるためには、良きクライマーであるための努力と同じような過程が大切であるかも知れない。

多様な登山が行われれば行われる程、その登山の根本であるところの努力の過程を見直す必要があるかも知れない。

（文部省登山研修所職員）

5月探鳥雑感

長沢修介

五月〇日　鹿島槍高原に行く。

白雪の鹿島槍荒沢が目前へ急峻にそびえ、雪消えの始った爺岳東面も大町から眺める姿と異って、荒々しい美しさを見せる。

昔は大きなブナの木が沢山あった所が切り開かれ、きれいに整地されて、一面に緑のスロープとなっている。

冬の白銀のスロープと異って、眼くるるような広さを感じる。

切り払われた斜面には、小鳥の姿もなく、牧場となった所にヒバリの囀りを聞く。

近年、近郊の田畑でもヒバリの囀りは少なくなったように思う。

麦畑には必ずヒバリが舞い上ったり、下りたりして美しい囀りを聞かせてくれたものであるが、麦畑も少なくなった昨今、ヒバリの田畑への出現も少なくなったのだろうか。

それとも、畑や原野が少なくなって、ヒバリにとっての安住の地が少なくなったと言う方が妥当だろうか。

一方、切り払われた中に残された白樺の木の梢で、ビンズイが囀る。

高原であることを表現するようにヒバリに似

た美声で転り続けるこのビンズイは、スキー場が開発されたらいち早くここに永住の地を決めたようで、チブ、チブ、シーと美声を響かせている。

ブナやミズナラの巨木のあった頃は、アカゲラやアオゲラの声にまじって、コロロロ…という樹幹をたたく音も聞かれたが、今は聞く術もない。

鹿島槍高原から大谷原への道も広くなって歩道から車道となった。

大谷原へ向って少し下った所で、マミジロの声を聞く。

キヨロン・ツー・と大声でゆっくり転る声を聞くと、深山だな、大木の林もあるなと思う。コルリのチャリ・チャリ・の美声も聞かれ、川音にまじって、鈴を振るようなチョチョビ・ピ・ツ・ツ・リリ…と転るノジコの声を耳にすると、この辺は昔の姿が残っているんだな、と思う。

遠くにホトトギスの声が、近くの山腹からは、ジュイチ・ジュウイチと喉からしぼり出すような呼びに似たジュイチの鳴き声を聞いて、昔の、自然の姿が全部失われてしまわなかった安堵感にひたる。

五月〇日　早朝、四時、車で落倉へ

林の中の一本道であった落倉も、別荘や会社の寮などがあちこちに建てられて、道路も縦横に開かれて戸惑う。

別荘の中の道を進むと、残された白樺の林が美しく、レンゲツツジの黄橙が目にしみるほど美しい。

カラ松の林の中に、イカルの「お菊、二十四」の声が沢山、林の歌手、クロツグミも転る。

梢では、ホホジロの転りも盛んである。

少し進んで、林の中の小川の辺りから、チ・ジュリー・ピ・ジュリーとゆっくりしたテンポで転るアオジの声を聞く。

安曇平では、アオジの転りはめずらしいのでそっと近寄ってみる。

ハンの木林の中を流れる小川の辺りが住家らしく、美声を張り上げてさかんに転る。東北信地方ではごく普通に見られる鳥であるが、当地方では、春秋の渡りの時季以外は、ほとんど姿を見せないのにめずらしいことと、その美声に聞きいる。

少し登り坂の道を進むとレンゲツツジが一面に咲き乱れ、目を奪う美しさである。

赤松の大木が点在する林で、キビタキの甘たるい転りが聞える。繁った林の少なくなった此頃、この鳥の美声も少なくなってしまった。

白樺とミズナラの立ち並ぶ林の中に、キャラ、キャラと鳴いて樹幹を攀じ登るオオアカゲラの姿を見る。

安曇野の初夏を象徴するレンゲツツジの花や、白樺の幹の白さと芽吹の美しさ、オオアカゲラの姿を手近に見ることができるのは、手を加えない自然の姿がそのまま残っている証であり、本当にうれしいことである。

ミヅナラのおそい芽吹きや、今はもう少なくなった柏の木の芽吹を楽しみ、白雪を頂く稜線を目前に望み、遠くホトトギスの声を、近くにノジコやキビタキの美声を聞きながら高原を歩いた。

年と共に山々が、別荘や、スキー場として開拓され、その土地の自然の姿が失われて行く中で、ここのように保護されているのはうれしいことである。

（大町山の会会長）

博物館だより

6月12日、付属放養園で飼育中のカモシカ〝沢子〟が子供を生みました。

沢子にとっては第4番目の赤ちゃんです。

沢子と子供

博物館「友の会」入会のおすすめ

博物館「友の会」が設立されてから11カ月が経過し、全会員は百二十名を越しました。

今までに次のような事業を行ってきました

・講演会　安曇の自然と文化　一志茂樹氏
・〃　アマゾンの昆虫　堀　勝彦氏
・八方尾根自然観察会
・星をみる会
・キノコ採集会
・動物映画会
・小鳥の声を聞く会

行事以外に友の会々報「ゆきつばき」が2号まで発行されております。

これからの行事

・山菜観察と飯ごうすいさん会
・高瀬ダム見学会（一般会員のみ）
・映画会（2回くらい）
・星をみる会
・栂池自然観察会
・史蹟・博物館めぐり
・キノコ採集会
・SLの仕組を知る会
・冬の自然観察スキーツアー（歩くスキー）

次のような特典があります

・博物館へ無料で入館することができます。
・一般・ファミリー・賛助会員には「山と博物館」「友の会々報」が配布されます。学生会員には「会報」が配布されます。
・支障のない限り博物館資料・施設が利用できます。
・年間を通じ傷害保険に加入します。
・友の会「会員証」とバッチが配られます。

年会費は次のようです

個人一般会員…五〇〇〇円、学生会員（小・中・高）…二〇〇〇円、ファミリー会員（親子・家族）六〇〇〇円。

賛助会員…個人および団体、一口一〇〇〇〇円以上

新入会員はほかに入会金五〇〇円が必要

申込・連絡先

〒398　長野県大町市神栄町　大町山岳博物館「友の会」事務局

TEL〇二六一二一一一〇二一一

山と博物館第24巻第6号
一九七九年六月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一
印刷所　大町市　倭町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）